

# ピンポン、のような

九〇分の喜劇

二〇〇七年四月二四日 再演版第五稿【上演版】 黒澤世莉

一幕一景 一〇〇分

登場人物 八人 男二人 女六人

江川チヅル 女 三四歳

小説家。ワシオの恋人。

大野トキコ 女 二一歳

大学生。スズメ、カモ、ツグミとは同じ大学の友人。

遠藤スズメ 女 二四歳

大学生。トキコ、カモ、ツグミとは同じ大学の友人。

村山カモ 女 二二歳

大学生。トキコ、スズメ、ツグミとは同じ大学の友人。この地方出身。ウズラの姪。

星野ツグミ 女 二九歳

大学生。トキコ、スズメ、カモとは同じ大学の友人。ワシオの恋人。

ワシオ大輔 男 三〇歳

フリーター、バンドマン。チヅルとツグミの恋人。

ハトヤマ俊介 男 四〇歳

会社員、編集者。

村山ウズラ 女 三四歳

旅館の女将。この地方出身。カモの叔母。

【時代】 二〇世紀から二十一世紀にかけてのいつか。

【時間】 初春の週末。午後一〇時。

【場所】 日本。木曾路のはずれにある、とある古びた旅館の新館、地下の娯楽室。外は春の長雨。

\*この戯曲は、「!」「?」「…」 「間」などは使っていませんが、そういう要素をたくさん含んでいます。そのときそのときの読むひとに選んでいただければいいと思っております。想像をふくらませながら読んでいただければ嬉しいですよ。

舞台の上には、卓球台が一台、ぽつんと置いてある。卓球台の上には、箱と卓球の道具。卓球台を囲むように、古びたソファと段ボール、毛布などがおいてある。

開場時、舞台上は暗い。しばらくして、電気がついたように明るくなる。すぐにチヅル入場、片手にはトートバッグ。ソファに腰掛け、ビールを飲みながらカラアゲをぱくついている。ノートに文章を書いているのは破つて丸め、丸めては破り、そこらじゅうに投げる。やがて書くことを諦める。途中でソファにかかっている布を膝にかけ、そのうちにすっぽりとかぶってしまう。

ウズラ、入場。ぐるっと場内を一周して、退場。消灯される。

チヅル、起き上がって、ちょっと困ったそぶり。退場。電気をつけてから、ふたたび入場。またすぐに毛布をかぶって、やがて眠ってしまう。

開演時間。

ウズラとハトヤマの声が聞こえてくる。「なにかっていうとここに来てるんですよ。お気に入りみたいで」「はあ」「真っ暗で居心地いいとこじゃないんですけどね、アレだし」「アレですか」など。二人、入場。ハトヤマは濡れそぼっている。

ウズラ ありや、ここもちがう。どこいつちやつたんでしようね。調子が出ないときはよくここに。

ハトヤマ 悪そうですか。

ウズラ さあ、あまりそういうことは仰らない方ですから。ただ芳しくはないときは、ここに籠もりがちです。

ハトヤマ こんなところで、いや失礼、

ウズラ 私たちが小さい頃は、ここが娯楽室で、一緒に遊んでたんですよ。今はちゃんとしたのが外に。お子さんはおいくつですか。

ハトヤマ この春から小学生です。

ウズラ 男の子。

ハトヤマ 女の子です。

ウズラ あらうちの子と一緒に、昔の私とチヅルちゃんみたいになるんじゃないかしら。今度は是非ご家族でいらつしゃってくださいね。

ハトヤマ じゃあ、ロビーで待たせて、

ウズラ まあそんな、お風呂いかがですか、お召し物もそんなですし、言っちゃ悪いけど、言っちゃ悪いようなお召し物ですよ。どこから歩いていらしたんですか。

ハトヤマ その橋のところです。

ウズラ ああ、もうあそこが。

ハトヤマ ええ、土砂が、木が倒れたんですかね、あれはヒノキでしたか、

ウズラ ヒバ、あすなろですねえ、このへん多いんですよ。役場に言っておかないと。

ハトヤマ あすなろ、へえ。

ウズラ あすはヒノキになろうって、似てるんですね、よく。

ハトヤマ 井上靖先生。

ウズラ さすが。編集者って大変なんですねー、こんな山奥まで。

ハトヤマ まあ、

ウズラ じゃ、お風呂場にご案内しますね。

ハトヤマ 結構です、

ウズラ いや、いいんですよ、お風呂くらい入ってください、減るモンじゃあ

りませんから、ね。あでも、

ハトヤマ いや、やつぱり、

ウズラ ハトヤマさん、靈感とか、お強い方ですか。

ハトヤマ え。

ウズラ なら大丈夫ですね。ほら、風邪ひく前に、さ、さ、そのうち見つかりますから、

ハトヤマ、ウズラ、退場。「ヒバにはヒバの良さがあって、時間をかければヒノキより丈夫なんです。ま、切っちゃいますけどね、うちでは」などと言いながら。

しばらくして、スズメ、カモの声が聞こえる。「ちょっと待ちなさいよ」「ご遠慮くださいって」などと話しながら、入場。カモはカメラを持っていて、なにかと写真を撮る。スズメの片手には自分の書いた小説の束。

カモ もうあきらめなよ。

スズメ イヤだ絶対イヤだ。

カモ せつかくなんだからさ、楽しくやろう、

スズメ 良く書けてるじゃない、トキコなんて実物よりよっぽどマシ。

カモ あんな子でもプライバシーはあるんだよ。

トキコ、入場。スズメの原稿束を奪おうとする。

トキコ あんな子の登場です。あんたむかつかないのあんなの書かれて。

カモ まあウソは書いてないし、

トキコ だから問題なんじゃない、学食の謎の食べ残しを食べるとか、居酒屋で謎の食べ残しを食べるとか、言ってる情けなくなってきたよ。

カモ 書き直せばいいじゃん、ちやちやつと。

スズメ これほんと、良く書けてると思うよ、初期江川チヅルっぽいじゃん。

トキコ だれそれ。

スズメ 知らないの。

カモ うん。

スズメ 平積みなってるじゃない、本屋で。本屋さん行ったことある。お店の  
中本で一杯のところ、服とか売ってないんだけど。

トキコ かつて行ったことがあるね。

スズメ 芥川賞とつたんだよ、江川チヅル。よく内定とれたね、

トキコ ああ、わたし国文だから。

スズメ うん、日本の文学だよね。

トキコ 本ばっか読んでるから、振られるんです。

スズメ じゃあ、卓球で勝ったら、いいよ。

トキコ そういうことなら、いいよね、てアホかねスズメちゃんは。

スズメ カモさん、

カモ 嫌いだし。

スズメ やっぱだめっすか。

トキコ あのさ。一個お願いがあつてさ。

スズメ うんなになに、なんでもやる。

トキコ なんか、さつきちよつとさあ、いたじゃん。

スズメ 誰が。

カモ わかんない。

トキコ いたじゃん、なんかこう、髪長めで、目がぱっちりしたひと。背が高  
くて、

カモ ラクダ人間。

トキコ 全然違うけど、たぶんそれ。その人連れてきてくれたら、いいよ。

スズメ ええ、そういうのはツグミにやらせてよ。

トキコ いないじゃないのよいま。

スズメ あいつさあ、ほんとちゃんとキャンセル料払ってくれるかな。

トキコ もらうわよ、ほんとバイトでドタキャンとかいつてありえないんです  
けど。

スズメ それやったら、投稿していいんですか。

チヅル、起き上がり三人の姿を見ると、また隠れてしまう。物音に振り向く

三人だが、もう隠れたあとだった。

カモ ツグミは、よくおごつてくれるよね。

トキコ ここあなたの親戚なんだからさ、タダにしてくれりゃいいじゃん。

カモ すごいこというね、

スズメ 見られてる気しない、ここ。

トキコ ちよつと、やめてよねさういうの。

カモ 幽霊見たことあるよ。すごく美人の。

トキコ うそ。

カモ うそ。

トキコ 成仏させてやろうか。

カモ わたしが美人だから。

スズメ 美人じゃないね。

カモ そんなことないよ、スズメだつてカワイイよ。

スズメ あんたが美人じゃないつて言ってるんだけど。

カモ そんなことないよ。

トキコ 早く、行つてきて、負け組ども。

スズメ はいはい、ついでに、酒もつてこよう、酒。

カモ じゃあ、トキコ留守番おねがい。

スズメ ここ、絶対なんかいるよ。

トキコ え、私もなにか、

トキコ、スズメ、カモ退場、そのときスズメの原稿を忘れていく。チヅル、毛布から顔を出し、スズメの原稿を広い、パラパラと流し読む。

チヅル 「これは私の、私に向けた、私のための物語」。ですか。あーあ。

ツグミ、ワシオの声。「立ち入り禁止つて」「平気平気」など。毛布をかぶつて隠れるチヅル。恋人同士特有の甘ったるい声を出しながら、入場。

ツグミ 嫌だ、なんか怖い。

ワシオ 怖くないよ。

ツグミ うん、怖くないよ、ワシオと一緒になら。

ワシオ こいつ。(卓球)やる。

ツグミ えー、わたし超下手だよ。

ワシオ いいっていいって。

ツグミ やだよ、負けるの悔しいもん。

ワシオ 手加減するから。

ツグミ ホントお。

ワシオ いくよ。すごく手加減した、サーブ。

ツグミとワシオ、卓球をはじめ。へたくそ。ツグミ、真剣なそぶりです、へんな掛け声だけを発する。

チヅル ウザイ。

ワシオ なに。

ツグミ え。

ワシオ なにか言ったでしょ。

ツグミ なんにも。

ワシオ え。

ツグミ なんにも言っていないよ。

ワシオ うそだあ。

チヅル ウザイ。

ワシオ ウザイ。

ツグミ ウザイ。

ワシオ うん、ウザイって。

ツグミ わたし、ウザイ。

ワシオ ツグミがウザイって。

ツグミ (卓球を止めて) なにかした、わたし。

ワシオ 言わなかった。

ツグミ なにを。

ワシオ ウザイって。

ツグミ 話せないもん（ピンポンしながらは）。

ワシオ そうだよね、ごめん。

チヅル ウザイよ。

ワシオ ほら、聞こえたでしょ、いまの聞こえたでしょ、誰かがウザイって言うてるの聞こえたでしょ。

ツグミ 誰かって。

ワシオ 空耳。

ツグミ え。

ワシオ 空耳だよ。

ツグミ わたし聞こえたよ。

ワシオ うそうそ。全部ウソ。

ツグミ うそ。

ワシオ うん、ウソ。聞こえないし言っていないし。

ツグミ 聞こえたでしょ、アレ。

ワシオ アレって。

ツグミ あの、なんか。

ワシオ この音だよ（とピンポン球をはずませる）。

ツグミ えー。

ワシオ ウザイとか聞こえないでしょ。

ツグミ いま。

ワシオ え。

ツグミ 今言ったでしょ、ウザイって、ウザイって言ったでしょ、つてことは聞こえたんでしょうウザイって、ねえどうなのどうなのどうなの。

ワシオ わかった、悪かった、聞こえてた、ウソじゃなかった、たしかにウザイと聞こえた。

ツグミ ウソつき。

ワシオ ウソじゃなくて、怖がらせたくなかったから。

ツグミ ウソじゃない。



ワシオ ここには俺たち二人しかいないのに、聞こえるわけないでしょ。じゃ、おかしいじゃない。

ツグミ 誰かいるんじゃない。

ワシオ え。

ツグミ この部屋に。

ワシオ、ツグミに寄り添う。

ツグミ やめてよ。

ワシオ 誰も見てないよ。

ツグミ いや、そんな、やめて。

暗転。停電したようだ。

ツグミ きゃ。

ワシオ 大丈夫、ただの停電だよ。

ツグミ 怖い。

ワシオ 俺がついてるよ。

ツグミ うん、いやだ、やめてよこんなときに。

ワシオ グッドタイミング。

ツグミ バカ。もう。

ワシオ かわいいよ。

明転。停電が直ったようだ。浴衣がはだけている二人。卓球台の上にはチツルののせたカラアゲが二コのとっている。

ツグミ カラアゲ。

ワシオ え。

ツグミ きゃー、カラアゲ。

ワシオ ど、どうしたの。うわ、カラアゲ。

ツグミ カラアゲよ。

ワシオ カラアゲだ。

ツグミ ヘンだよ、ここ。

ワシオ 落ち着け、落ち着けばなんにも怖くないぞ、きつとここにはカラアゲが最初からあったんだ、そう考えれば。

ツグミ カラアゲの上でピンポンした。

ワシオ してない、そのときは隠れていたんだ。

ツグミ どこに。

ワシオ わかった、つまりこれはサービスだ。

ツグミ え。

ワシオ 宿からのサービスカラアゲだ。

ツグミ ええー、

ワシオ 違いますよね。誰かいるんだ、ここに。

ツグミ じゃあ、見られてた、さっきの。

ワシオ 見られるの、好き。

ツグミ バカ。

ワシオ 誰か、いるのか。おい。ほら、誰もいないよ。それとも、見られるほうがいい。

ツグミ バカ。

ツグミとワシオ、ふたたびいちやつき始める。

トキコ、スズメ、カモの声が聞こえてきて、慌てて卓球台の下に隠れるツグミとワシオ。

トキコ 関係ないじゃん、

スズメ お願いですから。

トキコ ダメ、ただの遊びで。

トキコ、スズメ、カモ、飲み物を持って入場。

カモ カラアゲ。

トキコ え、

スズメ はあ、カラアゲだ。

カモ 美味しそうだね。

トキコ 誰か来たの、

スズメ なんでカラアゲが。

カモ テーブルがわりじゃない。

トキコ ピンポンしながら。

カモ 食べながら卓球してたんだよ。

トキコ おかしいだろ。

カモ ね。マナー悪いよね。

スズメ そこか、マナーか、問題点は。

カモ あと、食べ残しは良くない。

スズメ 良くないけど。食べ残しは良くないけど。

トキコ カモ、片付けて。やろうよ。

スズメ 誰かいるんじゃないの。

トキコ あんた見慣れてれば、おぼけなんて怖くないよ。

スズメ じゃあトキコさんは妖怪で。

カモ わたしオードリーでいいや。

トキコ あんた、シルバニアファミリー。

カモ えー。

トキコ ほら、いくわよ。

スズメ 勝ったらお願いね。

トキコ しつこーい、まあ負けないけどね。

トキコとスズメ、卓球をはじめ。カモは見ている。

カモ 食べ残しつて言えばさあ。

スズメ うん。

カモ ツグミつてよく残すよね、食べ物。

トキコ 残す残す。おかげで私が食べられるんだけど。

スズメ 貧しい。

トキコ ロハスです。

カモ あれホントなの。

スズメ あれって。

カモ 就活しないのは結婚するからって。

スズメ マジマジ。

カモ ふーん。

スズメ 言ったくないらしいけど彼氏に。

トキコ ダメじゃんそれ。

スズメ まあ、今までがひどかったからねー。

カモ バンドマンとか役者さんとかね。

トキコ いつもおごらされてたもんね。

スズメ こんどのはちゃんとした人なんだってき。

カモ バンドやってるんじゃないの。

スズメ 趣味でしょ、

トキコ 会社員だったし。

スズメ やだやだ、

トキコ 出版社とか、狙ったらいいんじゃない、受かるかどうかは別として。

スズメ あんたなんで受かったの。

トキコ 高さ、かな。

スズメ もうちょっと考えなさいよ、女なんだから。

カモ カワイイよねー、ツグミ。

スズメ 男の前ではね。

トキコ 露骨に態度変わるもんね、あの子。

スズメ あそこまでいくと、笑える。

カモ え、そう。

スズメ ほんとサバ読み過ぎだって何度、

ツグミ、卓球台の下から登場。トキコ、スズメ、カモの悲鳴。

ツグミ 座んなさい、あんたちそこに、ちよつと（と卓球台を指差す）。  
スズメ なんで、

トキコ ええ、ここですか、

ツグミ そう、ここ。

カモ ツグミー（今噂してたんだよ）、

ツグミ いいから座んなさい。

卓球台の上に座るトキコ、スズメ、カモ。

ツグミ あ、ワシオくん出てきていいよ。

ワシオ、出てくる。

カモ ラクダ人間。

ツグミ ワシオくん、彼氏。

ワシオ どうも、ワシオです、はじめまして。

トキコ はじめまして、トキコです、ツグミの学校の友達で、あ、このへんも、  
スズメ はい、スズメです、はじめまして、こんばんは。

カモ カモです、こんにちは。

ツグミ ワシオくん、ちよつと、なんか、おねがい。

ワシオ え。

ツグミ のど渴いちゃったし、

ワシオ ああ、なにか、

トキコ あ、ビールありますよ、ワシオさんビールとか飲みます。

ツグミ わたしなんか違うのが飲みたい。ね、

ワシオ うん、じゃあ、

ワシオ、退場。

ツグミ さて。

トキコ はい。

ツグミ どういうこと。

スズメ それは、あんたバイトだって言ってたじゃない。

ツグミ ウソよ。見りゃわかんでしょ。

カモ うん。

ツグミ 好き放題言ってくれて、ありがとう。

カモ いやあ、ふつうに喋ってた、

ツグミ 誉めてないのよ、ここ、誉めてないから。

カモ はい。

ツグミ これから誤解解くのに協力するように。

トキコ はい。

カモ 誤解って。

ツグミ サバ読んでると思っちゃうでしょ、わたしが。

カモ 誤解。

トキコ あ、よく言っておくよ。

ツグミ そうして。じゃあこれから、私たちが仲良しだつてことを見せつけるわよ。なにボサツとしてるの、早くおりて。

卓球台から降りるトキコ、スズメ、カモ。

ツグミ いくわよ、わたし、サイコー。さん、はい。

トキコ、スズメ、カモ わたし、さいこー、

ツグミ 違うでしょ、最高なのは私。あんたたちは、ツグミ、サイコー、でしょ。ほらいくよ、さん、はい、

トキコ、スズメ、カモ ツグミ、さいこー。

ツグミ いいわね、わたし、カワイイー。

トキコ、スズメ、カモ ツグミ、かわいいー、

ツグミ もっと大きな声で。

トキコ、スズメ、カモ ツグミ、かわいいー。

ツグミ いいわね、じゃあ、ビールもつていいわよ、はい、カンパーイ。

トキコ、スズメ、カモ かんぱーい。

ツグミ いやんトキコ内定おめでとうー。

トキコ うわーありがとーまじうれしー。

ツグミ スズメ小説家頑張つてね応援してるよお。

スズメ おす、がんばります。

ツグミ カモ、は、カンパーイ。

トキコ、スズメ、カモ かんぱーい。

カモ ツグミは結婚、

ツグミ 次。それ言ったら怖いぞ。

トキコ、スズメ、ツグミ かんぱーい。

ワシオ、お酒を持って帰ってくる。

ワシオ 盛り上がってるね、

ツグミ おかえりなさい、ごめんねー。

ワシオ いいよ。

ツグミ うん、ありがとう。

ワシオ みんな大学の友達だっけ。

ツグミ うん。よくいつしよに買い物とか行ったりするの。

ワシオ 若いね。

ツグミ わたしは。

ワシオ 若いよ、もちろん。

スズメ あれ、どこかで会ったこと。

ワシオ え、ごめん、覚えがないけど、あつたかな。

スズメ あ、ごめんなさい、気のせいです、きつと。

ワシオ あ、俺もよくやるから、気にしないでよ。

トキコ ワシオさんは、なにを。

ワシオ 俺は、ただの会社員ですよ。

トキコ へー。

カモ 会社楽しいですか。

ワシオ あんまり、かな。

トキコ ヘー。

ツグミ あれその指輪新しいの。

トキコ そうそうクロムハーツなの、可愛くない衝動買いしちゃった、

ワシオ ロックだね。

トキコ どんなお仕事を、

ツグミ ピンポンしましょうよ、みんなで、

チヅル ウザいなあ、もー。

トキコ え。

ツグミ また、

ワシオ 聞こえたね、

カモ 出た。

トキコ なにが。

カモ アレ。

スズメ ちよつと、マジで。

ツグミ アレって、

カモ ここ、出るのよ、スズキさん、

トキコ なになに、

カモ、すたすたとソファアの近くによつて、スリッパで床をはたく

カモ 逃げられた。

スズメ スズキさんってなんだよ。

カモ 言わない。

ツグミ 言わない。全然言わない。

カモ おかしいなあ。

トキコ 帰ろうか。

スズメ あ、怖い。

ツグミ 怖いよねえ。



ワシオ でっち上げだよ、あんなの。

スズメ 知ってます、あの噂。

ツグミ なにそれ。

ワシオ うん、いやでっち上げだと思っただけね、前に来たときに、女将さんから聞いたんだけど、ここ、出るらしいんだよ。

スズメ 温泉とか、誰も入っていないはずなのに、人の気配がするんだって。

おしろいの匂いがぷーんと、

ワシオ え。あ、なんでもない。

ツグミ ちよつと、やめてよ、

スズメ なに、なに、

ツグミ 何か見たの。

ワシオ 見てない見てない、けど、

カモ 見てないけど。

ワシオ さつき男湯に行ったら、化粧みたいな匂いがしてて、誰か入ったらまずいと思って、そのまま帰ってきた。

ツグミ うそ。

トキコ やだ、ワシオさん、やめてくださいよ、女の人が間違えて入ってただけじゃないですか。

ワシオ そう思う、俺も。

カモ ああ、あの人よく入ってるんですよ、桔梗が池の奥様。

トキコ いやだ、

スズメ いいよ。

カモ えー、ここからちよつと入った山の中に、桔梗が池っていう池があつて。ちよつと今くらいの季節かな、桔梗がいっぱい咲くんだけど、池も桔梗色だね、あ、青いのよ、つまり。キレイなところだし、小さいころよくチョウチヨとか取って遊んでたら池にはまってすごい泣いたりした。それらしいプールとかもあんまり好きじゃないから、海とか行かないのよね。

トキコ え。

カモ だから、あんまりプールとか好きじゃないの。

ツグミ 奥様は。

カモ ああ、桔梗が池の奥様。

スズメ それぞれ。

カモ えーと、なんだっけ。

スズメ それねらつてやつてるよね。

カモ そう、その池に良く出るのよ、桔梗が池の奥様っていつて、キレイな着物を召してて、顔も美人な、幽霊。その人を見ると、たたりがあつて、死んじやうんだつて。

ワシオ よくある話だよね。

トキコ ですよね。

停電。

ツグミ きゃ、

ワシオ 大丈夫、

トキコ ただの停電ですもんね、

カモ あーそういえば。

スズメ なに。

カモ 暗いと、ほら、アレよね。

スズメ なによ。

カモ 急に暗くなると、残像とか残るよね。

トキコ 残る残る、超残るよね。

スズメ ちよつと、どこにいるのよ。

ツグミ ここ。

ワシオ うん、ここにいるけど。

トキコ いま、手握ってるよ、右手は。

カモ わたし真ん中。たぶん。

ツグミ 私も。

ワシオ 俺は右手だけなにも握ってない。

スズメ 私は両手で握ってるの、誰か。じゃ、いま歩いているの誰。

ツグミ 怖い。

トキコ やめようよ、そういうの。

明転。卓球台の上に、チヅルがのせたおやきが五コおかれている。驚くトキコ、スズメ、ツグミ、ワシオ。

カモ いただきます、

スズメ 食うのかよ。

ツグミ 気味悪いよ、

トキコ 帰ろう、

ワシオ いや。

ツグミ なに。

ワシオ いくらなんでも、おやきはないだろう、おやきは。幽霊が名物おくか。

カモ おかない。

ワシオ この部屋に誰かおちやめさんがいる。

ツグミ わたしじゃないわよ。

トキコ わたしだって。

カモ もつてたら食べます。

スズメ え、ちよつと、わたしも違うわよ。ていうか意味わかんないんだけど、疑われるの。

トキコ おかしくない。あんた。

スズメ 幽霊とかいるわけないし

カモ えー、いるよー、

トキコ わけわかんなくして、アレをオツケーさせようとか、

スズメ あんたねー、

カモ わたし見たもん、小さいときに、

トキコ いまでもちっちゃいつつうの、

スズメ 人間よ人間、いまいるのは、

ウズラ、入場。

ウズラ あれー、みなさまお楽しみですか。

カモ あ、ウズラちゃん、

ウズラ あれー、カモちゃんも。

ワシオ あ、ごめんなさい、勝手に入っちゃって。

ウズラ いいんですよ、もともと使ってないだけですから。いやね、さっきのぞいたら電気がつけっぱなしになってたんで、また出たのかと思って。

ワシオ 出たって。

ウズラ アレですよ。でも、みなさんだったんですね、

カモ ついてたよ。

ワシオ 俺たちも、いじつてないよ、なにも。

ウズラ あらー、じゃあ、まあ、アレですかね。さいきんご無沙汰だったんですけどねー、

ワシオ 脅かさないうで下さいよ。

ウズラ 脅しじゃないですよー、私、しかとこの目で見てますから。それがウリですから。

スズメ えらいパンクですね。

ウズラ ねー、でもおかげさまでそれ以来商売繁盛で、いらつしやいますからねえ、そういうお話しが好きな方は。人に悪さをされるようなことはありませんよ。

トキコ え、この子たたりで死んじゃうって、

カモ うそ。

トキコ いろんな意味であんたが怖いわよ。

ウズラ あ、でも。

トキコ 何か。

ウズラ あるといえば、たたりというか、女性にだけ、ありますね。ほほほほほほ、

ウズラ、退場

トキコ え、ちょっと、

ワシオ 女将さん、

ツグミ なによ、アレ。

カモ ウズラちゃん。親戚。

スズメ あんたの家族みんなあなの。

カモ えー、わたしが一番かわいいよ、

トキコ シルバニアファミリーだつうの、鏡見る鏡。

ツグミ 女性にだけあるたたりつて、なに。

カモ さあ。

ワシオ 知らないの。見たことあるんでしょ。幽霊。

カモ 話とかしたことないし。

スズメ じゃ、今度聞いておいて。

ワシオ パンク好きなの。

スズメ いえ、まったく。

停電。

ウズラ、ろうそくを持って入場。おそれおののく一同。

ウズラ ロウソクお持ちしました、こうしよつちゅう停電が続くとねえ、大変  
でしょう。

ワシオ 脅かさないで下さいよ。

ウズラ あらー、ごめんなさいね、そんなつもりは、

トキコ 絶対あつたでしょ、

ウズラ ちよびつとだけね。

ツグミ 女将さん、女性だけのたたりつてなんなんですか。

ウズラ ああ、それはね。未練を残した女性がうちにお泊りなされると、桔梗が  
池の奥様に連れて行かれてしまふつていうことですよ。では、ごゆっくり。

ウズラ、退場。

トキコ 連れて行かれるつて、どういう意味かしら。

スズメ 死ぬんでしょ。

ツグミ 普通、そうよね。

ワシオ うん。

トキコ わたしたちは関係ないわね。

カモ うん。

スズメ なんでわたしの顔見るのよ。

ワシオ 男は平気なんだよね。

ツグミ 未練あるの。

ワシオ ないけれども。

ツグミ わたしも平気よ。

トキコ じゃあ、安心。

カモ じゃないの。

ツグミ よし、奥様もおばさんも何でも出て来い。

チヅル、毛布から出てくる。おどろく一同。悲鳴。トキコ走り去る。

チヅル うるさいなあ、

スズメ え、

チヅル ちよつと、考え事がしたいんですけど、一人にしてもらえませんか。

スズメ いきなり出てきてなんですか。

チヅル 最初からいたんですけど。

スズメ 困ります、そんなこといわれても、

チヅル 私も困っています。

カモ どちらさまですか。

チヅル 客です。

明転。チヅルとワシオはお互いに気づいて、顔をあわせないようにする。ワシオは部屋を片づけはじめる。

カモ 私もです、気が合いますね。

スズメ ご自分のね、お部屋に帰ったらどうです？

チヅル 雨がうるさくて。

スズメ ちよつと、

カモ おやきごちそうさまでした。

チヅル どういたしまして。

カモ お名前は。

チヅル タナカハナコです、

ワシオ まあ、じゃあ、行こうよ、ね。

スズメ、カモ、ツグミ、出て行く。

ワシオ タナカハナコで、もうちよつとなんかなかったの。

チヅル 新しい彼女、

ワシオ なにしてたの、

チヅル 可愛い。

ワシオ この二ヶ月さ。

チヅル 若い子ね。

ワシオ 二四。

チヅル あなたがつれてきたの。

ワシオ なにか、書けた。

チヅル バンドうまくいつてる。

ワシオ 書いてないんだね。

チヅル そういうところ、なおした方がいいわよ。

ワシオ 大丈夫。

チヅル それ、心配してくれてるの。

ワシオ 俺のせいかな。

チヅル どういう意味。

ワシオ 一人で勝手に会社辞めたり、バンドでばたばたしてたり、気を遣えてなかったっていうか。

チヅル 反省してるんだ。

ワシオ そういうわけじゃないけど。何が原因なの。

チヅル それが分かれば、苦労しないのよ。

ワシオ 出てるよ。拒絶オーラ。出来ること、なにもないのかな。

スズメ、登場。

スズメ 江川チヅルさん。

トキコ、カモ、ツグミ、登場。

ツグミ ワシオ君、いこ。

ワシオ ああ。じゃあ。

ツグミ またね。

カモ またねー。

スズメ え、行っちゃうの。

トキコ あ、うん、バイバイ。

スズメ あ、ペン持つてきて、ペン。黒くて太いの。

ツグミ、ワシオ、退場。

チヅル 行かないの。

スズメ 行きません。江川チヅルさんですよ。小説家の。

チヅル 違うわよ、

スズメ いや、江川さんですよ絶対、私、サイン会で会ったことありますよ。ね。

チヅル そうだけど。

スズメ こんなところであえるなんて感激です、ずっとファンです、「空のおわり、星のはじまり」大好きです。

チヅル ありがとうございます。

スズメ サインもらっていいですか。あ、もう持つてるんですけど、去年紀伊



国屋でもらったやつ、こんどは帯の、

カモ それ宿の、

スズメ ああつ、

チヅル 悪いけど、いまはプライベートだから、

トキコ すごいねー、

カモ 知ってる人。

トキコ 知らない。

カモ 私も。

スズメ さつき教えたじゃない、芥川賞とった作家だよ。

トキコ したっけ、そんな話。

カモ あれ、J文学。

チヅル それ恥ずかしいからやめて、絶対言わないでください。

カモ はい。

チヅル 本当に、独りにしてもらえるとありがたいんだけど。

スズメ あのここにサインしてください、浴衣のここ、

カモ だからそれ宿の、

スズメ ああつ、

チヅル 嫌です。

スズメ 嫌ですか、肩とかもみますよ。

チヅル 結構です。

スズメ 肩こり症なんですよね、エッセイで読みました。私上手ですよ、肩も

むの。おばあちゃんの肩毎日もんでましたから。

チヅル 結構ですから。

スズメ じゃ、もみますね。

チヅル やめてって言ってるの。

スズメ じゃ、サインと、あと写真とっていいですか。

チヅル やめて。

スズメ カモ、お願い。笑ってください。

チヅル 怒るわよ。

カモ もう怒ってますよ。

チヅル もつと怒るわよ。

スズメ じゃあ、なんかしてほしいことがあったら言ってください、なんでも  
しますから。

トキコ え、それは一人にしてあげたらいいんじゃない。

チヅル そう、あなた、わかってますね、その通り。

スズメ それ、あんまり役に立ってる感ないじゃないですか。私はもつと積極  
的にお役に立ちたいんですよ。

チヅル それが迷惑なの。

スズメ 格好いい、そういうハッキリしたところ。ワシオさんて江川さんの彼  
氏ですよ。そうですね、雑誌にいつしよに写ってるのを見ましたよ。

チヅル 何々、なんの話ですか。

スズメ 気づきますよ、普通、あんな空気、

トキコ 気づいた。

カモ 全然。

チヅル あなたのお友達、ちよつと個性的ね。

トキコ 江川さんの大ファンなんですって。

チヅル ファンって言うより、ストーカーみたい、

スズメ ですね。ばらされたら面倒なことになりますよね。

チヅル 何が言いたいわけ。

スズメ いやだ、わかってるくせに、そんなこと聞くんですか。

チヅル 脅迫っていうのよ、それ。

スズメ そんな怖いことしませんよ。お願いです、ただの。

カモ こういう人だったんだね、スズメ。

トキコ 新しい発見ね。

チヅル そんなにサインなんか欲しい。

スズメ 欲しいですね、それに、新しい原稿も。書いてるんでしょう。ここ  
で。それ以外にこんなところに来る理由、ないですもんね。あと、私も小説書  
いてるんですよ、それ、読んで感想とか聞かせてもらったり弟子にしてみらっ  
たりとか、住み込みで働かせてもらったりとか、  
チヅル 断る。

ツグミ はい、

スズメ ありがとう。ツグミ。

ツグミ なに。あ、ごめんね。こんど絶対払うから。じゃあね。

スズメ あのね、

チヅル 卓球しましょう。

スズメ え、

チヅル 卓球、するのよ。あなたが勝ったら、サインでもなんでもします。でも、私が勝ったら、独りにしてもらえますか。

スズメ それ、私にメリットないですよね。

チヅル 私と卓球できるなんて、ちよつと自慢できると思うけど。

スズメ それだけですか。

チヅル やるの、やらないの。

スズメ やる、やります。緊張するなあ。

ワシオ じゃ、俺たちはそろそろ、

ツグミ 待ってよ、ちよつと、

トキコ イヤ帰った方が、

ツグミ ええ、意地悪しないでよー。

トキコ いやいや、かなり善意入ってますよ。

ツグミ じゃ、まぜてよ。ねー。

ワシオ そうだね、せつかくだもんね。

チヅルとスズメ、卓球をはじめ。チヅルが圧倒的に上手。

スズメ 上手いんですね、卓球。

チヅル 勝てない勝負はしない主義なの。

スズメ わたしが卓球部だったらどうしたんですか。

チヅル 私のファンに卓球が上手い子なんているわけがない。

スズメ それ、思い込みですよ。

ワシオ ああ、そろそろ帰ろうか。

ツグミ 早っ、

ワシオ やりたいの。

カモ 帰りたいそうだよ、ワシオさん。

ワシオ そんなことないよ。

トキコ 帰ったほうがいいですよ。

カモ 面倒なことになりますよ。

ツグミ 面倒って、

チヅル そこ、余計なこといわない。

ツグミ え、なにになに、

ワシオ ね、なんだろうね、

チヅル いらつく、

スズメ ええ。

ワシオ バカか。

ツグミ え、知り合い。

チヅル いや、よく知りません。

ワシオ うん、ぜんぜん知らない人だよ。

トキコ ああでも、それちよつとわかるかなー、なんて、

ツグミ ちよつとちよつとやめてよー、

ワシオ 言われちゃったなあ、あはは。

チヅル ごめん、もう限界だわこれ（卓球を止めて）。

ワシオ どういう嫌がらですか。

チヅル 知り合いも知り合い、

ワシオ どちらさまですか。

チヅル 往生際が悪い。ていうか、つきあってるんです私たち。

スズメ あ、格好いいかも。

ツグミ 誰と誰が。

チヅル 私と彼が。

ツグミ え、なに。

チヅル ごめんなさい、ちよつと、嫌な思いさせて。

ツグミ どういうことですか。

ワシオ 前の彼女だよ。

チヅル いつ別れたの。

ワシオ 今言うことじゃないでしょう、それは。

チヅル 連絡取れなかつたらイコール別れたことになるよ。

ワシオ どうしちゃったの、そういうこと言う人じゃないでしょ、

チヅル まあいいや。じゃあ、さようなら。はい、お別れ。

ワシオ まあ、はい。

ツグミ 江川チヅルさん。小説家の。ワシオくんの彼女の。お噂はかねがね。

はじめまして、星野ツグミです。ワシオくんの彼女です。ちよつと、立て直す

時間を下さい。なんなの、この女。ていうか、なに、あんたのその口の聞き方。

チヅル ごめんなさい。

ツグミ ていうか、この人の気持ち考えたことありますか。

チヅル ああ、もう、過去のことですから。

ツグミ そういうこと言ってるんじゃないですよね、バカですか。

チヅル バカじゃないつもりですけど。

ツグミ じゃわかりますよね、わたしが何を言ってるのか。この人あなたに未

練タラタラなんですけど、迷惑です、はつきり言つて。

チヅル それ、彼の問題ですよね。

ツグミ あなたがいるからです。

チヅル ごめんなさいね、私は私が存在することまで止められないわ。

ツグミ ぶちますよ。

チヅル 言ってるうちはぶてないものよ。(退場しようとする)

ワシオ 逃げるのか。

チヅル 面倒くさい。

ワシオ はつきりさせよう。

チヅル 何を。

ワシオ 俺はお前と別れる気はない。ツグミもそれは分かっているよな。

ツグミ うん。

チヅル なにそれ。私は嫌よ。

ワシオ 勝手なこと言うなよ。

チヅル あなたに言われたくないけど。

ワシオ そこは柵に上げるとして。二ヶ月音信不通で何も無い方がおかしくな  
いか。

チヅル おかしくない。

ワシオ なんかつてもおかしくないだろう。

チヅル その子はどうなるのよ、あなた嫌よねそんな関係。

ツグミ 私は。ワシオくんが幸せなら、それでいい。

ワシオ 俺も同じ意見だよ。お前が本当にいいなら、それでいいと思う。でも  
いま別れたら、お前はどうかんだ。

チヅル 最近、二人でいて楽しいことあった。

ワシオ あんまり。でも悪いことばかりでもなかった。初めてここに来たと  
きとか。

チヅル あなたあのとときも他に女つくってたわね。

ワシオ そう、途中でばれて口聞いてもらえなかった。女将さんが余計なこと  
言うから。

チヅル でも、ウズラちゃんに騙されて、桔梗が池に行ったらあなたがいて。

ワシオ 白桔梗が満開だったな。

チヅル その子はどうなるの。

ワシオ 別れる。

ツグミ 嫌だ。ワシオくとチヅルさんが付き合ってるのは、いいよ。良くな  
いけど、我慢する。でも別れたくないよ。

ワシオ それはひどいよ。

チヅル もう十分ひどいでしょ。

ワシオ そうだけど。

ツグミ ワシオくんの、そういうひどいところ。

ワシオ ごめんな。

ツグミ チヅルさん、彼と付き合い合ってあげてください。

ワシオ ツグミ、

ツグミ 本当はチヅルさんがすごく大事なことも知ってる。私のことを嫌いじ  
やないことも分かっている。だから別れるって言うてくれたことも、でも弱いか

ら寂しさを紛らわそうとしていたことも分かる。

チヅル あなたそれでいいの。

ツグミ 分かっている、このままじゃダメだってことも。でも、それでいいんだ。ワシオくんが幸せならそれでいい。私はたまに会ってくればそれでいいからお願います。

チヅル うまいなあ。そうやって同情引くところ。男は弱いからね。

ツグミ 違います。

チヅル 残念。私、そういうの効かないんだ。

ワシオ やめろよ。

チヅル 帰るなって言ったのはあなたでしょう、

ツグミ 可哀相。不安で怖くて、仕方がないんですね。

チヅル 彼のことはもう、本当にどうでも良いんだ。ゆずるわ、あなたに。

ツグミ ワシオくんはものじゃない。

カモ じゃ、こうしましょう。

ツグミ なに。

カモ 卓球で勝った方が彼女で。

チヅル 面白いアイデアですね。

スズメ この写真、週刊誌とかに持つていくと、どうなるかなって。ほら、最近大きな話題ないじゃないですか、流行作家の愛憎劇のもつれが田舎のひなびた温泉旅館で、なんて、三文小説っぽくて悪くないかなって。身にぎやかになるの、嫌いじゃないですよね。

チヅル いい死にかたしないわよ。

スズメ かつこいい「いい死にかたしないわよ」、それ「カケヅキ」のハナちゃんとおんなじセリフですよね。

チヅル あなたは。

ツグミ、黙ってラケットを持つ。

チヅル え、それで気が済むんですか。

ツグミ すまないわよ。なにやったってすまないわよ。

チヅル そうですよね。

ツグミ じゃ、殴った方がいい。

チヅル 私が何をしたの。

ツグミ ここにいる。

チヅル どこにしようとするの勝手じゃないですか。

ツグミ 今日ここにいないことないじゃない。

チヅル あなたたちが来たんじゃないの。私もう二ヶ月もここに世話になつて  
るのよ。

スズメ で、書けたんですか。

ツグミ 本気でやってください。

チヅル これは嫌味に受け取らないで欲しいんだけど。彼のどこがいいの。ひ  
どい目に遭わされて、これだけ。

ツグミ はじめてなんです。そういう意味じゃなくて、優しくしてくれた人な  
んです。私バカだから。

チヅル 男運、ないのね。

ツグミ 好きなように言えば。でも手加減はしないで。

カモ では、一一点先取の三セットマッチ、でいいですか。これより、星野ツ  
グミ選手と、

スズメ 江川チヅル先生。

カモ の、ワシオさん争奪カップ決勝戦を行います。サーブはじゃんけんで。  
(勝った方から)では、どうぞ。

ツグミ、ワシオとやっていたときよりはるかに上手い卓球。チヅルと互角に  
わたりあう。カモは審判。

ワシオ ツグミ、卓球、上手いんだね。

トキコ 知ってた。

カモ ううん。

トキコ みんな、意外な一面があるのね。ていうか、あんたルール知ってるの。  
カモ わたし、卓球部だったから。



トキコ 嫌いだって言ってたじゃん。

カモ だから。

トキコ 何にも知らない自分が嫌になってきたよ。

ウズラ、ハトヤマ、入場。

カモ 誰でも知られたくないことの二つや三つ、さあ。

トキコ シルバニアファミリーにもあるんだね。

ウズラ あらー、みなさん楽しそうで、いいわねえ若い人たちは。

カモ 嫉妬ですか。

ウズラ お世辞よカモちゃん。チヅルちゃん。お客様ですよ。

ハトヤマ こんばんは。

ウズラ もー探しちゃったわよー。

チヅル ハトヤマ、さん。(卓球を止める)

ハトヤマ 久しぶり。

ツグミ ちよつと、まだ勝負ついてないんだけど。

チヅル いいですよ、あなたの勝ちで。

ツグミ なにそれ。嫌な女。

チヅル 知っています。あなたもいい線いってますよ。

ツグミ ありがとうございます。

ハトヤマ 邪魔だった。

ツグミ 帰ってくださいます。

ハトヤマ すみません、お取り込み中みたいですよ。

トキコ いえ、全然そんな、

カモ ある意味最悪のタイミングですよ。

ウズラ あらー、そんなこと言うものじゃないわよ、カモちゃん。ハトヤマさんは歩いていらつしやったんですからね、この雨の中を、必死に。ぬかるむ山道を滑り滑り、

カモ そのわりにはさっぱりとしますね。

ハトヤマ いや、ボクはお断りしたんですが、仲居さんが風邪を引くからお風

呂をどうぞって、すごく強く勧めてくださるものだから、ついついご好意に甘えてしまつて。上着を乾かしていただいているんですよ。

スズメ え、この人は誰ですか。

ウズラ ハトヤマさん。編集の方だそうですよ。

ハトヤマ 新冬社のハトヤマと申します。

スズメ 新冬社、すごいいつも読んでます。

ハトヤマ ありがとうございます。

スズメ 原稿を取りにいらつしやつたんですか。

ハトヤマ まあ、そんなところです。

チヅル はい、これ（とスズメの原稿を渡す）。

スズメ あ、

ハトヤマ ありがとうございます。（とパラパラ流し読みながら）

ウズラ 売れっ子は困つちゃうわねえ、こんなところまで押しかけてくるなんて、

チヅル ウズラちゃん、なんで、

ウズラ だって、普通じゃないわよ、歩いてここまで来る人なんて。なにかよ

つぼどの事情が、

チヅル 誰にも言うなつて、

ウズラ ここまで来ちゃつたら仕方がないでしょ。

スズメ 江川さんと仲良しなんですか。

ウズラ こう見えても三〇年来のお付き合いですからねえ。チヅルちゃんのおじい様の代からご贔屓にしていただいて。いまでもはつきり覚えていますよ、初めてあつた日、いまではこんなに色も白くておしとやかな方ですけど、あのころは腕白でねえ。真つ黒に日焼けして、男の子と競つてカブトムシを取りにいきましたっけ。ね。

チヅル それ、私じゃない。

ウズラ あれ、

チヅル おじい様の代からはお世話になつてゐるけれど。

ウズラ ああ、桔梗が池が好きで。

チヅル それよ、

ウズラ 二人でよく行きましたね、奥様を見るんだって、夜中に二人で迷子になったこともありましたっけ。

チヅル あのとときは大変だったわね、駐在さんに怒られて。

ウズラ そのときはじめて、ね。

カモ ウソ。

ウズラ おばちゃん悲しいわ、

トキコ なんて、そんな、こんなところに、

ワシオ 泊まってないって言われたから。

トキコ ああ。

カモ まあ普通はやめときますよ。

ワシオ ですよね。

カモ こうなりたかったんですか。

ワシオ 違うよ。いや、そうかもしれないね。

ツグミ (チヅルに) いちいちムカつくのよ、あんた。いい気になってるんじゃないわよ。

ワシオ ツグミ、もうやめようよ。オレが悪かったよ。

ツグミ あやまるくらいなら、あやまるくらいなら。

ワシオ でも、最初に言っただじゃない、

チヅル やめときなさいよ。

ツグミ あんたは口出さないでよ。

トキコ ワシオさんのどこがいいの。

ツグミ ええ。優しいし。大人だし。

カモ お金あるし。

ツグミ うん。

トキコ 恵まれない子なんですよこの子。

ツグミ 変なこと言わないでよ。

トキコ 昔はヤンキーばかりと付き合ってた。

ツグミ 私もそうだったからね。

ワシオ そうなんだ。

トキコ プーにばかり好かれて。

カモ やつとまともな人だと思つたらこれですから。

ワシオ 悪かったね。

カモ 悲しい三〇年。

ツグミ 二九年。あ。

ワシオ 二九。え、ツグミほんとはいくつなの。

ツグミ 二四歳だけど。

ワシオ どこ見て言つた今。

ツグミ 二四歳。

ワシオ 本当に。

ツグミ だって、チヅルさんは、小説家で、美人で、大人で、お金もあつて、私が勝てるどころなんて何もなくて。

ワシオ だからって、そりゃあねえだろう。

ツグミ それってそんなに重要なところ。

ワシオ 重要だろうだって、

ツグミ 二四歳なら誰でも良かったの。

ワシオ 違うよ、

ツグミ じゃあなんで怒るの。

ワシオ だって、そりゃあ。家族計画とかあるだろうが。

ツグミ 歳関係なくない。

ワシオ 重要だろう。

ツグミ そうじゃなくて、私いつでもいいよ。ワシオくんの子供ならいつでも産みたいよ。

ワシオ そんなこと言つたつてそれじゃあ仕事しないと。

ツグミ え、どういふこと。

ワシオ いや俺、いまプーだから。

ツグミ え、会社辞めたの。

ワシオ うん。ちよつとバンドやろうかなつて、本気で。

ツグミ ウソ、ついてたんだ。

ワシオ いや、嘘をついていたわけではなく、その場の勢いで、ほら会つた頃は辞めたばかりだったし、失業保険も、

トキコ　なんで今更。

ワシオ　いや、バンドの方が、格好良いかなって。

トキコ　それだけ。

ワシオ　結構切実なの。

カモ　三〇男のコメントとは思えないです。

ワシオ　ね。三〇になったらバンドやめるよね、普通。

ウズラ　ロックンロール、格好良いじゃないですか。

トキコ　そうそう、似合いますよ。

ワシオ　ありがとう。

ツグミ　じゃあ、この子どうするの。

ワシオ　妊娠してるの。

ツグミ　うん。

ワシオ　それはウソだろう。

ツグミ　ひどい。

ワシオ　じゃあ本当なのか。

ツグミ　ウソですけど。こういうこと疑うのは男として最低じゃない。

ワシオ　ああ俺は最低だよ。二股かけるし女を歳で選ぶし会社を辞めてバンドをやるしその上嘘つきだよ。

ツグミ　最低。

ワシオ　そうだよこんな最低な男とは別れた方がいいんじゃないですか。

ツグミ　そうするわよ。別れよう。

チヅル　え、そんなことで。

ツグミ　だいたい、ここに私連れてくる時点で、あんたと別れる気がないって言うのは良く分かった。

チヅル　そういうの全部、

ツグミ　覚悟の上よ、でももうお金のことです苦勞するのは嫌なの。

ワシオ　お前だって、俺じゃなくて金が好きじゃないか。

ツグミ　そうだよ。お金が嫌いな女なんているわけじゃないでしょ。

ワシオ　だから卓球も手加減したのか。

ツグミ　嫌われたくないの。もう必死なのよ。必死だから嘘もつくの。ワシオ

くんのためならなんでもするよ、嘘だつてつくし演技だつてする。でももう自分だつてわかんないよ、ワシオくんが好きだったのか会社員が好きだったのか。

ツグミ、退場。

トキコ 追いかけないんですか。

トキコ、退場。

チヅル ちよつと追っかけなさいよ。追っかけろつて、あんたの仕事でしょうが。

ウズラ お邪魔かしらね、わたし、

ワシオ いやいやいや、そんなことないです、

ウズラ 若い人たちだけのほうがお話も弾むんじゃないかしら、

ワシオ 女将さんのほうが若いです。

ウズラ 意味わからないわねー、でも嬉しいわ、一〇代で通用するかしら、

カモ 無理無理。

カモ、退場。

ウズラ そ。

ワシオ アホか、

ウズラ アホじゃないですよ。

ワシオ 言つてないですよ、女将さんに。

ウズラ なんとというか、大変だったでしょうねえ。

ワシオ だつたつていうか、いまだに大変な感じですよ。

ウズラ この色男。ハトヤマさん、お部屋は準備できてますので。

ハトヤマ ああ、ありがとうございます。

チヅル 泊まつていく気ですか。

ハトヤマ これ、ご冗談でしょう、「これは私の、私に向けた、私のための物語」

つて、いやいや、

スズメ どこがいけないんですか。

ハトヤマ キミ読んだんですか。

スズメ 読んだつていうか、ものすごく読みました。

ハトヤマ 人前じゃ話せませんよ。

チヅル どうぞ。

ハトヤマ そう。物語は、まあいいでしょう。初期の文体に近いですね。登場人物、いいんじゃないですか、そんなものどうでもいいんです。あなた独自の空気が肝でしょう、なんですかこれは、通したらバラバラ、なにもない。それに、いつも新しい挑戦が、成功するにしろ失敗するにしろあつただけ、ないですよ。

スズメ そんな、良く読んでくださいよ。

ハトヤマ 自分の完璧な世界、懐かしむ気持ちは分かるけど、これじゃ江川チヅルの縮小コピーだ、七一パーセントの。完全に閉じちゃってるよ。読むのは読者ですから。

チヅル だつてさ。

ハトヤマ これ、

スズメ 私です。

ハトヤマ 素晴らしい。ごめんなさい。よく似てるから、ある意味で、いや、素人にしちゃよく書けてると思います。

スズメ そうですか、あの、新冬新人賞に応募しようと思うんですけど、

ハトヤマ いやあこれはちよつと厳しいかな。いちど持ち込んでもらつて、いろいろ相談に乗ってもらえば、

スズメ 今、言つてください、ぜひ。

ハトヤマ 仕事で来たわけじゃないから、

スズメ 原稿受け取るの、仕事じゃないですか。

ハトヤマ そうですよ。

ウズラ ええ、ウソだったんですか、

チヅル べ切ないから。

ウズラ あらー、

チヅル あったとしても、なんにも書けてないんだけど。

スズメ 二カ月で、一ページも、ですか。

チヅル そうね。

スズメ だって、書くのは早い方だって、

チヅル 雨がうるさくて。

ハトヤマ そんなに降ったら洪水です。

スズメ 寒い。

ウズラ これこれ。

スズメ なんにも書けなくなっちゃったんですか。

チヅル そうかもね。

ハトヤマ どんな作家でも、一度や二度そういうことはある。

ウズラ おじいさまも、大変だったそうですよ、暴れて二階から落っこちちゃったり。

スズメ でも江川さんにはなかった。

ハトヤマ いままでは、ね。

チヅル そんなにすら書いていたワケじゃないけど。

ウズラ お部屋がお花畑みたいになっちゃうところ、そっくりだものね。

ハトヤマ 何か見つかりましたか。

チヅル どちらかというと、無くす物の方が多いです。

スズメ わたし、手伝います。

チヅル 何を。

スズメ なんでもします。

チヅル あなたに出来ることは、ない。

スズメ 分かりました。

スズメ、退場。チヅル、スズメの残した原稿を手に取る。

ハトヤマ いい子ですね。

チヅル ああいうの大嫌い。身勝手に、

ワシオ よく似てるよ。



チヅル どこが。

ウズラ 周りが見えなくなっちゃって、こう、突っ走っちゃう感じ。

チヅル そうかー、そうなんだー。ああ、疲れた。

ウズラ お疲れ様。

チヅル ワシオ、のどかわいた。

ウズラ じゃあ、なにか持つてきますよ。ハトヤマさん、きつと服が乾いてますよ。私、なんでもわかりますの。ハトヤマさん。ほら。ほら。ほら。ほら。

ほら。ほら。ほら。

ハトヤマ え。え。え。え。

ウズラ、ハトヤマ、退場。

ワシオ コンプレックスがあつて。

チヅル 知ってる。

ワシオ くだらないことなだけでさ。

チヅル 全然気にしてないのに。

ワシオ 俺に全然興味ないんだもん、おまえ。

チヅル そんなことないけど、だからロックンローラーなんでしょ。

ワシオ 我ながらスーパー馬鹿だよな。

チヅル そういうところ、うらやましいよ。

ワシオ だろ。やつぱり、別れようぜ。チヅル、面白いからさ。だめだね。も

う。全然俺見てないもん。全部自分で解決しちゃって、一人で抱えて、そんなのおれ必要ないじゃん。

チヅル そんなこと、ない。

ワシオ 新人賞も、初めての連載も、大きな賞を取ったあとのストレスも、それを乗り越えたときも、いま本当に書けなくなったことも、俺に興味が無くなつたことも、いつも俺から聞いて、お前が答える。

チヅル 変な気遣わないで大丈夫だよ、もうなにか、書けそうな気がしてるんだ。(嘘をつくときの手クセがでる)

ワシオ その手。

チヅル さすが、彼氏歴七年。

ワシオ 同じ事の繰り返しだ。でも俺、お前のこと、尊敬してるんだ、作家として。一番好きな作家はジョン・レノンだけど、日本人で一番好きなのは江川チヅルだ。

チヅル あの子はどうするの。

ワシオ 別れるよ。そんな都合良くない。

チヅル 格好いいこと言うね。

ワシオ 無理してんだよ。

チヅル 私も、相当無理してるよ。

ワシオ 知ってる。じゃあな。元気で。

ツグミ、入場。

ツグミ ごめんなさい、立ち聞きするつもりじゃなかったんだけど。

ワシオ いや。(退場しようとする)

ツグミ ワシオくん、お別れなの。

ワシオ ごめんな、勝手に。

ツグミ お前ホントだよ、ふざけんなよ、何勝手に一人で決めてんだよ。それじゃあ女の子といっしょじゃなかよ。やってること。

ワシオ さっき別れるって、

ツグミ ノリだよ、その場のノリ、いちいち真に受けてんじゃねえよ。

ワシオ すいません。

ツグミ だいたいなんで追いかけてこねえんだよ、おかしいだらあそこで放っておくのは。

ワシオ そうですよね。

ツグミ 私が忘れさせる。ううん、忘れなくていい、ずっと好きでいていい。

ワシオ 俺が嫌だ。

ツグミ 私は無理して我慢なんかしない。私はあなたを一人にしない。私がワシオを好きにさせるから。いまは彼女のことを好きでいいから。

ワシオ 約束なんて出来ないよ。

ツグミ 約束が欲しいんじゃない、私が納得いくまでがんばりたいのよ。

ワシオ 俺と、付き合ってくれませんか。

ツグミ わたし、さくつと結婚しようとか思うよ。

ワシオ 計算高くていいじゃない。

ツグミ 掃除も洗濯もごはんもぜんぶお母さん任せだよ。

ワシオ そういうのはやっていけば慣れる。

ツグミ ホントは同い年だよ。

ワシオ 正直びつくりしたけど、え、同い年。

ツグミ 早生まれだから、同学年。

ワシオ うん、別に、歳は関係ない。

ツグミ やった、やったぞ、私の勝ちだ、ざまみろ江川チヅル。

ワシオ おいおい、

ツグミ もう演技しない。ありのままの私を好きになれ。

ワシオ えらいことになったな。

ツグミ ロックの魂、教えてやるよ。

チヅル ちよつと。

ツグミ あん。

チヅル そのダメロッカー、よろしく。

ツグミ 言われるまでもないよ、バーカ。チヅルさん。

チヅル なに。

ツグミ こんど（卓球の）決着つけよう。はははは。

チヅル 絶対嫌だ。ははは。

ワシオ なんだこれ。

ツグミ じゃあ、いただいていきます。

ワシオ、ツグミ、退場。スズメの原稿を読むチヅル。

ウズラ、入場。飲み物を持って。

ウズラ あら、寂しくなっちゃって。

チヅル ありがとう、でもビールが良かった。

ウズラ ごめんなさいね。

チヅル こんどから、よろしく。

ウズラ ハッスルしちゃったわね。

チヅル やつと、落ち着いたかな。ごめんね、さっき八つ当たりして。

ウズラ チヅルちゃんの八つ当たりは、挨拶みたいなものだから。

チヅル ウズラちゃん言い過ぎ。

ウズラ あのおじいさまに逆ギレ出来たの、チヅルちゃんだけですよ。

チヅル だって理不尽じゃない、お茶を入れろっていつて、なんでお茶持つてくるんだ酒だろうとか。ああ、そうか、似てるんだ。嫌だなあ。

ウズラ おかげで、文才も受け継いだんじゃない。

チヅル やつぱり、似てくるものなのね。

ウズラ あだね。私、二人目が出来ちゃったみたい。

チヅル ほんと、おめでとう。

ウズラ ありがとう。ホントは予定はなかったんだけどね、経営も苦しいし。

チヅル そうでもなさそうだけど。

ウズラ 色々あるのよ、こう見えて。でもね、やつぱり、出来ちゃったものはしょうがないわよね。

チヅル そうね。

ウズラ チヅルちゃん。

チヅル なに。

ウズラ つらかったら、辞めてもいいのよ。チヅルちゃんはチヅルちゃんなんだから。好きなようにすればいいわ。

チヅル うん。

ウズラ わたしは小説のことは良く分からないけど、

チヅル 私にとつては、子供みたいなものだから。こんなこと、子供がいない女が言ったらおかしい。

ウズラ 嫌な聞き方しないで。

チヅル ごめん。もう書けないのかなって思うと、怖いよ。

ウズラ (歌ってから、)のど自慢出ようって約束、覚えてる。

チヅル うん。

ウズラ 来月くるのよ、応募しましょうね。いまから練習しない。

チヅル うん、ありがとう。いまはやめておく。

ウズラ もう、シャキッとしなさい。

チヅル ウズラちゃんは、すごいね。

ウズラ チヅルちゃんだつてすごいのよ。あなたは私の、自慢のお友達なもの。

でも自分のすごさつて、自分では分からないのよねえ、困ったわ。

チヅル わたしもう、何を書いたらいいのかわからないんだ。

ウズラ 行く、桔梗が池。

チヅル この雨の中を。

ウズラ あら。明日、明日晴れたら、行きましょう。私も休みます。

チヅル いいよ、大丈夫。

ハトヤマ、入場。

ハトヤマ 失礼。

ウズラ じゃあ練習にしましょうよ。約束だからね。

チヅル わかった。

ウズラ じゃあ、おやすみなさい。

チヅル おやすみ。

ハトヤマ おやすみなさい。

ウズラ、退場。

ハトヤマ 何を練習するんですか。

チヅル ピーナッツかな(と、歌う)。

ハトヤマ 初めて拝聴しましたよ、いや、お上手なんですね。

チヅル 子供の頃はそりゃ、歌だつて。

ハトヤマ こんなに怒ったり笑ったりする先生も、初めて拝見しました。

チヅル 冷血人間みたいですネ。

ハトヤマ 感情を表に出すタイプではないでしょう。これおみやげ、セルカン

の新作。(コンビニ袋に入った本と紙束を渡す)

チヅル ありがとう。

ハトヤマ さつき渡しそびれちゃって、

チヅル 多くないですか。

ハトヤマ 古今東西書けなくなった作家って言うのは一杯います。使えそうなのやっただけコピーしてきたんだけど結構な分量だね。かいつまんで言うと、結局、本当に些細なきっかけなんですね、

チヅル わたし。振られちゃいました。

ハトヤマ ははは。

チヅル (スズメの原稿を出して) どう思います、これ。

ハトヤマ そうですね。

チヅル こういうの、もう書けないな。

ハトヤマ あなたには必要ありません。

チヅル 些細なきっかけ、なんですよね。

ハトヤマ 僕に出来ることなら、なんでもします。

チヅル 一緒に死んでくれますか。

ハトヤマ 「悲しみや涙のためには、人は、その死者の物語を知らなくてはならない。その背景を、細部を、知らなくてはならない。一方喜びや幸福は、」  
チヅル 「一方喜びや幸福は、そうしたものを要求しはしない。それらは曖昧なままで、十分に、満足している。」 サガンって、確か、

ハトヤマ サガンは一九五七年に事故で瀕死の重傷を負っています。

チヅル そうですよね、それに、

ハトヤマ ウィスキーが好きでアルコール中毒、二度の離婚、カジノの女王としても有名です。

チヅル 随分、些細な人生ですね。

ハトヤマ 些細なきっかけ。きつかけが些細。じゃあ、アガサのほうが似合う、マスコミ嫌い文壇嫌い、そもそも人があまりお好きじゃない。只今現在失踪中。

チヅル サガンを出してきたのはあなたでしょ。

ハトヤマ ははは。

チヅル ミステリーでも書いてみましようか。

ハトヤマ いいですね、江川チヅル最新作は、衝撃のミステリー。英語で書きましょう、フランス語でも、

チヅル 私、おじいさまに似てるんですって。

ハトヤマ 尊敬しています。江川秀鳳先生、偉大な思想家でした。

チヅル 入水飛び降りオーバードーズ、なんでもありの自殺常習犯ですよ。

ハトヤマ あの時代のひとたちはみんな死にたがった。

チヅル 事故でも起こせば、何か変わるかしら。

ハトヤマ 悪くないアイデアですね、絶対死なない方法ならば。

チヅル 死ぬ可能性がなければ、意味がないでしょ。

ハトヤマ 現代の作家が描かなければいけない絶望は、

チヅル 死ではなく、生の絶望だ、ですよ。

ハトヤマ 平和ぼけの国で死はあまりにコメディだ、といったのはあなたですよ。

チヅル ハトヤマさんの影響です。

ハトヤマ もともと資質がおりだったんです。僕は何も。こんな話で良ければ、いくらでもお付き合いしますけどね。

チヅル だってあなた、アメリカ行っちゃうじゃない。

### 物音。

ハトヤマ 日本の現代作家は、もっと紹介されてしかるべきだ。もちろん、君の作品も。第一集に君の作品を入れる。これは君の為じゃなくて僕のエゴだ。君は僕の知りうる限り君の作品は、もっとも生活する女に近く、狡くて、身勝手、思い通りにならなくて、美しい。現代日本作家の柔らかな絶望は世界中で読まれるべきなんです。それを証明したい。

停電。しばらくして、明転。

ハトヤマ 照明します。じゃあ、また。

ハトヤマ、退場。「何やってんの」「いえなにも」などと、入れ替わりにトキコ、カモ、入場。

トキコ いや、あの、卓球したいかな。とか。

チヅル あはははははは。どうぞ。

トキコ、カモ、卓球を始める。スズメ、入場、ぐちゃぐちゃだったものを伸ばしたような原稿用紙を持って。

スズメ 静かにね、先生の邪魔しないで。

トキコ はい。(と卓球を止める)

スズメ いやいやひどい部屋ですねほんと、片付けできないってホントなんだ。これどころが書けないんですか。

チヅル 勝手に人の部屋に、

スズメ ちゃんとノックしました。

チヅル そりゃ、誰もいないわよね。

スズメ ちゃんと掃除もとききましたから。

チヅル ほんと、すごいね、あなた。

スズメ スズメです。遠藤スズメ。

チヅル スズメちゃん。

スズメ はい。

チヅル 何が問題なのか、わかる。

スズメ え、ぜんぜん問題とかはないんですけど。

チヅル あなたの書いたこれ、まあつまらないんだけど、これも借り物ばかりなの。でも、すごいなって部分もある。あなたが、生きているのが分かるのよね。言葉が。

スズメ でもつまらないんですよ。

チヅル 一行二行を除いて、全然ダメ。笑っちゃうくらい才能無い。だから、手伝ってもらわない。

スズメ どうやったら才能できるんですか。



チヅル これ、初めて書いたの。

スズメ 短編はいくつか、でも一〇〇枚以上書いたのはこれがはじめてです。

チヅル 私も才能なんて無いのよ。あなたよりもっと若い頃から、原稿用紙を何千枚も無駄にして、

スズメ デビュー二〇歳ですよね。

チヅル いままで何冊読んだの。

スズメ わかんないですけど、五〇〇冊とか、ですか。

チヅル 私はね、あなたぐらいの年の頃は、もう数え切れないくらい読んだ。年にそれくらい読んでたわ。それで書いて書いて、別に誰かに読ませようっていうんじゃない、書かすにはいられなかったっていうか、私にはそれしかなかったっていうか、腱鞘炎になってもまだ書いて、そしたらいつのまにかこうなってた。

スズメ わかりました。もつとがんばれってことですね。

チヅル まあ、結局ダメかもしれないけど。

スズメ どっちですか。

チヅル 知らないわよ。結局、覚悟の問題だから。ね。

スズメ はい。

チヅル あと、友達大事にしたいの。

スズメ もちろん。

チヅル じゃあもうちょっとフィクションにしたらいんじゃない、誰か一人に焦点を絞ってき。それで、誰か一番読んで欲しい人を思い描いて、書くの。そしたらちよつとはマシになるでしょ。

スズメ じゃあ、

チヅル 弟子にはしないわよ。でも、たまにお茶飲むくらいは、しましょうか。

スズメ 死んでもいい。

チヅル 書けない作家が、才能のない作家に、小説を教えるの。ちよつとおかしくない。

スズメ めちゃくちゃおかしいです。

チヅル、ソファに座ってノートになにやら書き始める。

スズメ ごめんね、これ。(自分の原稿を破りながら)

トキコ うん、わかればいいのよ。

スズメ ありがとう。

トキコ、カモ、卓球を始める。

チヅル おじいさまとよくやったんだけど、五分間であらすじを書くの。「箱書きが最も重要だ」って言うて、私は面白くないなあ、と思ってただけだね。プロットって可愛く無いじゃない。

スズメ 面倒くさいですし。

チヅル そう。でも今は、すごくよくわかるんだな。

スズメ なんでもやります。

チヅル よし、じゃあ、早く書けた方が勝ちね。よーい、スタート。

チヅルはスズメに、書きながら聞かせる。「ある女の子がずっと頭も良くて美人で親の愛情にも恵まれて、ちやほやされながら育つのね。でもまあご多分に漏れず大学出たらただの人で、いろんな挫折を味わうの。それで人生を踏み外すんだけど、すごくボロボロのアパートに引っ越したらそこで自殺した幽霊がいるんだけど、その幽霊がすごく気が合う幽霊で、彼女に欠けているものをどんなうめてくれるのね」など。やがて言葉はなくなり、おのおの原稿用紙にペンを走らせる。

カモ でもさ。

トキコ なに。

カモ わたしも彼氏欲しいな。

トキコ ええ。

カモ なに。

トキコ ちよつと、いいかも、ね。

停電。卓球の音と、ペンを走らせ紙をめくる音が続いている。暗転。

終わり

引用

フランソワーズ・サガン 「逃げ道」 河野万里子訳、1997年、新潮社

上演にあたって

上演許可は左記までお問い合わせ下さい。

合同会社 Level 19

電子メール [info@level19.net](mailto:info@level19.net)

発行元 黒澤世莉 二〇二一年七月三日